

聖戦論

— 古くて新しい戦争モデル —

1

Overview

1. 古代世界の場合
2. キリスト教の場合
3. イスラームの場合
4. 近代日本の場合
5. 聖戦の一般的特徴
6. 今回の課題

2

1

古代世界の場合

3

神々の戦い

バビロニアの『エヌマ・エリシュ』、ヘシオドスの『神統記』などに「神々の闘争」神話が見られる。これらは、古代世界における神聖政治と表裏一体の関係にある。

4

イスラエルの歴史（ヘブライ語聖書）

- 戦争は「主の戦い」（サムエル記上18:17）と呼ばれた。
- 「あなたの意のままにあしらわさせ、あなたが彼らを撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではならない」（申命記7:2）。
- 「彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くした」（ヨシュア記6:21）。
- 「このように、主よ、あなたの敵がことごとく滅び、主を愛するものが日の出の勢いを得ますように」（士師記5:31）。

5

2

キリスト教の場合

十字軍のコンスタンティノープルへの入城（ウジェーヌ・ドラクロワ、1840年作、ルーブル美術館所蔵）



6

十字軍（1095～1270年、8回の遠征）

- ウルバヌス二世のクレルモン会議での演説（1095年）
「かくて互いの間に平和を保つことを約したおん身らは、東方の兄弟たち、神に背く呪われた種族の脅威にさらされている兄弟たちを、救う義務を負っているのである」。
- ウルバヌス二世による十字軍の呼びかけには、異教徒によって「汚染」された聖地を「浄化」しなければならない、という主張があった。また、人々の間には**世界の終末**が近い、という期待があった。
- 十字軍以降、ムスリムはキリスト教徒にとって大きな脅威と見なされ、しばしば「悪魔」そのものとさえ見なされた。

7

イスラームの側から見た十字軍

「一九八一年三月、トルコ人メフメト・アリー・アージャはローマ法王を射殺しようとしたのであったが、手紙のなかで次のように述べている。〈私は十字軍の総大将ヨハネ・パウロ二世を殺すことに決めた〉。この個人的行為を超えて明らかになるのは、中東のアラブは西洋のなかにいつも天敵を見ているということだ。このような敵に対しては、あらゆる敵対行為が、政治的、軍事的、あるいは石油戦略的であろうと、正当な報復となる。そして疑いもなく、**この両世界の分裂は十字軍にさかのぼり**、アラブは今日でもなお意識の底で、これを一種の強姦のように受けとめている」（マアルーフ『アラブが見た十字軍』454頁）。

8

ルターの場合

(『トルコ人に対する戦争について』1529年)

- 「教皇が**アンチ・キリスト**であるのと同様に、トルコ人は肉体をもって現れた悪魔である」(『ルター著作集』第1集第9巻、40頁)。
- ルターは、イスラームを終末時のアンチ・キリスト的な権力として解釈した。教皇制とイスラームを並置することによって、彼のカトリック教会像をイスラームにも投影することになり、結果的に、イスラームを、行為(業)による義を説く宗教としておとしめることになった。ただし、ルターは十字軍政策から距離を取っていた。

9

- 「アンチ・キリスト」とは？
- 「子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。これによって、終わりの時が来ていると分かります。」(「ヨハネの手紙一」2:18)
- イスラームの終末論にも類似の考えがある。救世主マフディーの到来、偽救世主ダッジャール(≒アンチ・キリスト)の到来。
- なぜ、ルターはカトリックとイスラームを対置させたのか？
- プロテスタント原理(特に、信仰義認論)との関係

10

潜伏する十字軍的思想

「制度化された十字軍が終了した後も、キリスト教の絶対性を前提とする聖戦意識や十字軍によって呼び起こされた**浄化志向**が、必ずしも人々の意識から消滅することはなかった。しかもそれは、十字軍を否定したはずのプロテスタントのほうに強く現れる。」

(山内進『十字軍の思想』157頁)

11

3

イスラームの場合

12

ジハード

- フランク軍（第2回十字軍）への対応の中で、それまで廃れていたジハード思想がよみがえる。ヌールッディーン（ザンギー朝第2代君主、在位1146-74）は、中東イスラーム世界の再統一を目指し、ジハードを宣言した。
- ただし、ジハードの解釈は一義的ではない。

13

防衛的ジハード

- 「イスラームの家」を異教徒の侵略から守る防衛的な戦い。
→ 正戦論
- 「汝らに戦いを挑む者があれば、アッラーの道において堂々とこれを迎え撃つがよい。だがこちらから不義をし掛けてはならぬぞ。アッラーは不義をなす者どもをお好きにならぬ」(Q2:191)。

14

革命のジハード

- イスラーム世界の浄化と境界の再設定を目指す。→ 聖戦論
- (特徴) 善と悪の存在論的・二元論の立場。無差別攻撃をも容認し得る絶対的な目的。ジハードの戦死者には殉教者として楽園(天国)が約束されるという終末論(来世観)。
- 自国内におけるジハード(「近い敵」に対して)：腐敗した政治体制の打倒を目的とする。例：エジプトのジハード団によるサダト大統領暗殺(1981年)。
- 国際社会におけるジハード(「遠い敵」に対して)：イスラーム世界に対する敵対勢力(主としてアメリカ)の打倒を目的とする。グローバル・テロリズムの源泉の一つとなる。例：アルカイダによる暴力的活動(9・11同時多発テロ事件を含む)、ISに起因するテロ(指揮系統が明確でないことも多い)

15

4

近代日本の場合

16

大東亜共栄圏の思想

- アジアの諸民族を欧米帝国主義列強の抑圧・支配から解放し、共存共栄の大東亜共栄圏の樹立を目指す（アジア主義）。1940年頃から唱えられ始めた。
- 大東亜戦争（太平洋戦争）は、その目的遂行のための「聖戦」と考えられた。

17

家族原理——「八紘一宇」の精神

- 地の果てまでも一つの家のように統一して支配する。君臣・父子・兄弟など上下の関係を規律する天皇制イデオロギーを、共栄圏内部の諸民族・諸国家にまで行き渡らせ、一大家族国家圏を形成しようとした。
- そのために、**利他・愛他の精神**を説く。
- 欧米の利己主義・個人主義へのアンチテーゼ。ナチス・ドイツとの類似。

18

政治・社会状況

- このえふみまる 近衛文麿（1891-1945）「英米本位の平和主義を排す」（1918年）
- 英米の平和主義は、現状維持を便利とするものが唱える事なかれ主義なのであって「正義人道」となんら関係がない。
- 日本社会における「時の言葉」（特に1932年以降）
- 「非常時」「非常時下」「非常時局」「超非常時」等。これらの言葉が、日本社会のファシズム化のための土壌を形成した。大正デモクラシーの流れに立つ人々は、非常時には平常の権力と平常の手段が必要だと訴えたが、大勢は国家主義に流れていった。

19

キリスト教の状況

- 国家への忠孝（愛国心）とキリスト教信仰は両立し得ると考えた。「日本的キリスト教」の形成。
- 1944年、「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」
- 宗教団体法のもと、1941年に日本基督教団は成立（同志社の源流である組合教会も合流）。
- 1967年、日本基督教団「第二次世界大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（次スライド）

20

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。

しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかつて声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。

21

仏教の状況

- 明治維新以降、仏教教団は、幕藩体制下における国教的地位を失い、また、政府の神仏分離令や民間でなされた廃仏毀釈の運動により、その存立基盤が大きく揺らいだ。さらに、政府が黙認するようになったキリスト教の存在も仏教にとって大きな脅威として映った。
- こうした事情の中で、仏教教団は、早い段階から国家の政策に迎合し、国家の価値規範に対する仏教の意義を積極的にアピールした。昭和のファシズム期には、他の宗教同様、仏教は競うようにして戦争協力に荷担していった。

22

5

聖戦の一般的特徴

戦いを善と悪の闘争と見なす

- 「より小さな悪を選び取る」といった「比例性の原則」は存在しない。善と悪との間には絶対的かつ明確な区分が存在している。したがって、敵対勢力と戦うのは、相手が何か悪い「行為」をしたからではなく、相手が悪い「存在」だからなのである。
- 存在論的な次元での善悪の峻別が聖戦論の第一の特徴である。

23

24

絶対的な目的を追求する

- 「比例性の原則」だけでなく、戦闘員と非戦闘員の「区別の原則」も、しばしば無視される。
- また、聖戦は特定の宗教の主導によってなされるだけでなく、国家が**疑似宗教的な力**（排外的な愛国心）を帯びてなされる場合もある（ナチズム、大東亜共栄圏における理想）。

25

世界を戦争状態として理解する

- 聖戦であれ、ジハードであれ、戦争状態が平和より望ましいと考える人々がいる。その理由の一つは、世界が戦争状態にあるという理解が、暴力行為を正当化する道徳的根拠になるからである。
- Mark Juergensmeyer は、**終末思想**を舞台装置として「演出」される戦いを「コスミック戦争」(cosmic war) と呼ぶ（M・ユルゲンスマイヤー『グローバル時代の宗教とテロリズム』）。

26

【参考文献】

- カレン・アームストロング『聖戦の歴史——十字軍遠征から湾岸戦争まで』（塩尻和子、池田美佐子訳）柏書房、2001年。
- 山内進『十字軍の思想』筑摩書房、2003年。
- アミン・マアルーフ『アラブが見た十字軍』（牟田口義郎、新川雅子訳）筑摩書房、2001年。
- 池内恵『現代アラブの社会思想——終末論とイスラーム主義』講談社、2002年。

27

- ブライアン・アンドルー・ヴィクトリア『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』（エイミー・ルィーズ・ツジモト訳）光人社、2001年。
- 大西修『戦時教学と浄土真宗ファシズム下の仏教思想』社会評論社、1995年。
- 小岸昭『世俗宗教としてのナチズム』筑摩書房、2000年。
- 小原克博『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』晃洋書房、2010年。

28

6

今回の課題

- 『一神教とは何か』 第四章「4 聖戦論」を読んでください。
- 聖戦は、古い起源を持ちながらも、近現代の戦争観にも大きな影響を及ぼしています。上記箇所の内容と今回の授業内容を踏まえて、どのようにすれば、聖戦的な思考に陥らないようにできるか、あなたの意見を述べて下さい。